# 妖幻抄―５章―

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖幻抄―５章―

【Ｎコード】
Ｎ０９０２Ａ

【作者名】
維月十夜

【あらすじ】
朝、目が覚めると、また明がいない、彼女は黄兎（こうと）に噛まれて、ケガをしていた！傷を手当てしていた氷雨は、明に、ある疑問を感じた。

## 暴かれた真実（前書き）

ども、維月です。
今回は、明の出生の謎（？）が分かります（＾＾）
これから、どうなるのか、楽しんで読んでくださいな。
次回もよろしくです。

## 暴かれた真実

朝、氷雨は、すぐ傍に明がいないのに気づき、目を覚ました。
「ん～…明、いねぇのか、って明！？」
「そんな大声で呼ばなくても、ここにいる」
慌てて起きあがった氷雨に、明は、ため息をついた。
「心配性だな」
「お前が、しょっちゅう消えるからだろ？」
「そうか」
「そうかって、明？どうしたんだよ、その傷っ」
明は、しきりに、腕に付いた傷をなめていた。
「さっき、黄兎（こうと）がいたんだ、撫でようとしたら、噛まれた」
黄兎とは、その名の通りに、黄色い毛並みの兎である。
油断をして近づくと、彼女のように噛まれるのだ。
しかし、これといって、毒を持っているわけではないので、危険度は低い。
「なーにやってンだ！どれ、傷見せろ」
氷雨は、明の腕を掴んで、傷をなめた。
「くっ、擽ったいぞ、いいっ、もういいから！」
じたばたと、氷雨の腕の中で暴れる。
「こら、動くなって…明っ」
（人間の、血の味だな…だが、なんだろうか？引っかかる。匂いが、違うような気がする、気のせいか？）
「もういいっ、いいから！外行ってくるっ」
「あっ、こら明！ったく」
逃げだした明に舌打ちして、氷雨は、頭を掻いた。

明は、畑沿いの小道を走り、村の中心に向かって走った。
村の中心には、広場を主とし、集会所、調理場などがある。

明は、集会所をのぞく。そこには、女子供や、老人たちがいた。
「おや、明じゃないか、中にお入りよ」
入り口にいた年かさの女が、明に気づき、手をこまねく。
「おはよう、みんな」
「遠慮せずに入んなよ、腹は空いてないかい？」
「うん、大丈夫」

その頃、ぽつねん…と残された氷雨は、疾風にからかわれていた。
「さっき、明を見たぞ？集会所で、女どもに服、着せられてたみたいだぜ」
「服？なんか、やな予感…」
氷雨は、ぼそりと呟く。
「なんだよ氷雨、お前…見たくねぇのか？明、きっとカワイイぜぇ？」
「別に、ンなこと言ってねぇだろう…」
「見たいんだったら、さっさとそう言えよ。行こうぜ」
「あ、ああ…」
（また、うるせぇんだろうな…あれには、参る）

明を連れてきた、年かさの女は、名を瀬那（せな）といった。
「おや…」
瀬那は、明の背に、赤い三日月形の痣（あざ）を見つけて、眉をひそめた。
「明、お前…この痣」
「瀬那？痣が、どうしたんだ？」
「明、いいかい…この痣と同じのが、あたし達の背中にもあるんだ。そうか、どうりで、珍しい毛並みだったわけだね…」
「あたし、どうしたんだ？瀬那」
おろおろとする明を、瀬那は抱き締めた。
「心配するこたないよ、明…お前は半魔だけど、あたし達と同族だよ、父さんが、人狼だったんだろうね」

「えっ！？二人とも、死んだんじゃ…」
明は、言葉に詰まった。
死んだと思っていた父が、生きていたのだ！？

## 十六夜（前書き）

あの時、死んだと思っていた父親が、生きていた！？
明は、希望に、心躍らせる。

## 十六夜

「母さんは、残念だけどね…妖ってもんは、そう簡単に死なないんだよ。それにね、あたし達人狼は、人間とよく似てるじゃないか。そういうのがあったって、おかしくないのさ。父さんは、死んだふりして…あんたに、逃げる隙を与えてくれたんだねぇ」
「父さんが、生きてるの？」
「うん、ケガも、大分よくなった…明のその髪は、父さん譲りなんだね。きれいな赤毛だ。ほら、服も…髪も、結ったらよく似合うこと」
「今の話、本当なのか？」
その声に、瀬那は振りむく。
「氷雨、いい時に。どうだい？明、よく似合ってるだろ」
氷雨は、息を、のんだ。
「あー…もう、ダメだねぇこの子は！ホラっ、なんか言ってやりなよ！」
「あ、ぁぁ明…キレイ、だな」
しばらく空いた間に、拗ねた顔をする明。
「おっ、怒るな、ホントだぞ？」
「ありがと。氷雨に、そう言ってもらえて、嬉しい」
距離をおいて、見つめ合う二人。
「はあぁ、若いってのはいいねぇ～」
と、瀬那。
「んだのう、ワシらにも、そんな時もあったなぁ」
「懐かしいのうー」
年寄り達は、それぞれ懐かしみながら、二人を見ていた。
「瀬那、父さんが、生きているなら会いたいっ、どこにいるんだ？」
「心配しなさんな、父さん…すごく明を心配していたよ、よかったねぇ、あたしが案内する、ついておいで」

「ありがとう！」
「おっ、俺も、行ってもいいか？」
行こうとした明の背中に、氷雨は言った。
「うん、行こう、氷雨」

三人は、森の中を歩いていく。
勾配のきつい坂を、上った先に、半ば、草に埋もれた小屋が現れた。
「ここだよ、さ…行っておいで」
「うんっ」
頷いて、明は、入り口に顔を覗かせ、父を呼んだ。
「父…さん？」
「明…明なのか！？入っておいで、お前っ、よく無事で！」
明の父は、半身を起こして、明を抱き締めた。
「父さん、会えて…嬉しい、でも…」
急速に、その表情が曇る。
「母さんのことだな…あいつのことは、本当にすまない」
「ううん…運が、悪かっただけ」
「明、隣にいる少年は、どなただい？」
「父さん、このヒトは氷雨。あたしを拾ってくれたの」
父から離れ、氷雨の傍に立つ明。
「どうも…」
軽く、会釈する氷雨に、彼は、笑みを浮かべた。
「私は、十六夜（いざよい）といいます。娘を、大事にしてやってください。話は、聞いていました、好き合っていると」
「はい…」
氷雨は、否定しなかった。
「氷雨、お前」
頬を、紅潮させる明。
「明、おいで…十六夜殿、明を、俺にください。俺からも、頼ンますっ」

氷雨は、十六夜を、まっ直ぐに見据えて言った。
「ふぅむ…明、お前も…もう子供ではないからな、お前の、好きなように生きなさい。いいね？」
「父さん…」
「私は、傷が癒えても、ここにいるつもりだ。また、いつでもおいで？そのうち、子供でも見せに来ておくれ」
「子っ！？」
二人は、同時に赤くなってしまう。
「待っているよ、明を頼みます、氷雨」
「分かった、必ず、幸せにするから」
「ああ！」
「父さん？また、来るよ。思ったより、元気そうでよかった」
「また、おいで、その時は、もっと話をしような？」
「うん！」

十六夜の小屋を出て、明は、すっ頓狂な声をあげた。
「ああっ！瀬那～っ、待ってと言ってたのに、先に帰るなんて」
しゅん、と項垂(うな)れる明の頭を、氷雨は、優しく撫でてやる。
「気を遣ってくれたんだろう、許してやれ」
「うん、許す。氷雨がいるからな」
明は無邪気に笑って、氷雨の腕に抱きついた。
「明、見ろよ、あれ…今日は満月か」
氷雨は、中空に浮かぶ、月を指さした。
「ほんとだ…キレイ」
「冷えてきたな…風邪、ひかねぇうちに帰るぞ？」
そう言って、先を歩く氷雨に、明は、ふにっ、と首を傾げた。
違和感があるのだ、彼の頭には、獣の耳なんて、ついていなかったはずだ。
「氷雨、氷雨っ！」
「なんだよ？」

「耳っ！耳が生えてるっ」
明は、氷雨の金色の立ち耳を、指さして言う。
「は――――――…お前なぁ、自分にだってあるだろうが。ほら、触ってみろよ」
「え？」
ふに、と自分の頭に、柔らかなものを確かめて、明は驚いた。
「えっ、耳だ！耳生えてるっ」
「それにな、耳だけじゃないぜ？尻尾だってある」
（コイツ…気づいてなかったのか！）
氷雨は、なにか誇らしげに、尻尾を一振りした。
「あ、ホント…あたしにもある。でも氷雨、昼間には、耳と尾はなかっただろ？どうしてだ？」
「ん――――…なんつーか、習性？まあ…そんなもんだ、お前だってそうだっただろ？」
「うん、そうかぁ…」
「周り、騒ぐだろうな」
「なにが？」
「お前の、今の姿みたら」
「んなっ！あたしっ、そんなにヒドイのかっ！？」
「んな訳あるかい、お前は…キレイだ」
「なんだ、今の間は」
「いや、別に…ん？」
氷雨は、闇の中に燃える、明かりを見つけて、目を凝らした。
「どうした」
「火ぃ焚いてンのか、疾風たち、いるのかな…行ってみるか」
「ごまかすなっ、それ、お前の悪い癖だ！」
「まー、いいじゃねぇか…行こうぜ？」
氷雨は、食い下がる明の頭を撫でた。
「もうっ！」

闇の中、赤々と燃える広場の炉端で、疾風たちは、酒盛りをしていた。
「氷雨のヤツ、なんか変わったよな？明が来てから、角が落ちたっつーか」
「なぁ疾風、お前…なんか知らねぇのかよ？」
「ンなこと、本人に聞けよ…噂をすれば…来たぜ」
疾風は、闇を見つめた。
「よ、疾風…俺も混ぜてくれよ」
「女連れか、そういや…明はどうしたよ？まさか、留守番、ってこたぁねえだろう」
「いや、それが…な？」氷雨は、チラ、と隣を盗み見る。
「んん？」
それに気づいた疾風は、一瞬、眉をひそめた。
「いや、お前…明か？！お前、人間じゃなかったのか！？」
「いいだろう、半魔だが…同族なんだぜぇ？」
強めに肩を抱く氷雨に、明は、恥ずかしそう面伏せる。
「ホレ、明、顔なんか伏せンなよ…もったいねぇ」
「疾風、あたし、どこか変か？」
「なーにがだよっ、変だなんて、とんでもねえ…申し分のない、いい女だ」
自信を持て、と頭を撫でられ、安心したような笑みを見せる明。
「よ――し、いい子だ」
「なあ疾風、あたし、もう子供じゃないよ。その言い方…なんか、やだ」
「カワイイからいいんだ――っ」
「うわっ、コラやめろ、もうっ、この酔っぱらいめっ！」
ぐしゃぐしゃと、髪をかき混ぜる疾風の手を払おうと、明は、可愛らしく奮闘した。
そのうちに、疾風が寝てしまい、酒盛りはお開きになった。

「ふわ…ぁ」
明は、欠伸をして布団に潜りこむ。
氷雨は、明を抱き締め、頬を寄せた。
「氷雨？」
「期待されてたな、親父さんに」
「なんのだ、どうでもいいが…苦しいぞ」
「その、子供のこと、な」
赤くなりながら、小声で言う氷雨。
「そうだったか？ふぁ…もう寝る、眠い」
うにうに、と身じろいで、寝息を立て始めた明に、ため息をついてから、氷雨は目を閉じた。
（やれやれ…でも、まあいいか、ゆっくり進むさ）
煌々と輝いていた満月を、暗雲が覆っていく。
やがて風が止み、ぽつぽつ、と雨が降り始めた。

## 十六夜（後書き）

読者さま方、お疲れ様です（＾＾）

『妖幻抄』まだまだ続きます、これからもよろしくです。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0902a/

妖幻抄―５章―

2010年10月10日05時07分発行